

No.2506

中国南北朝時代の貨幣経済と周辺諸地域

帝京大学文学部 専任講師

柿沼 陽平

本課題では中国古代貨幣経済史に関するこれまでの研究をふまえ、とくに「中国南北朝の貨幣経済と周辺諸地域」を検討した。とくに、従来「自然経済」や「物々交換経済」と形容されてきた南北朝期に焦点をあて、貨幣的機能をもつ物財（銭や布帛）に関わる文字史料と考古資料データの双方を蒐輯した。同時に貨幣の定義問題に関しては拙著『中国古代の貨幣』（吉川弘文館、2015年）で多角的に検討した。それをふまえ以下三点を検証した。

第一に、中国古代貨幣経済史を理解する上で必須となる基礎史料の詳細な読解。当初の予定どおり、『漢書』食貨志訳注を作成中である。現在すでに関連史料のほぼ全てを蒐輯しおわっており、その中間報告として『漢書』をめぐる読書行為と読書共同体—顔師古注以後を中心に—（榎本淳一編『古代中国・日本における学術と支配』同成社、2013年）と『漢書』をめぐる読書行為と読者共同体—顔師古注以前を中心に—（『帝京史学』第29号、2014年）を執筆した。今後3年以内に訳注を順次刊行する予定である。

第二に、南北朝期貨幣経済の再評価。まず魏晋南北朝期の主要議題をとりあげ、その中に貨幣経済を位置づけるための理論的考察を行なった。その成果が「中国古代のくび」とその「つながり」（『歴史学の可能性』北樹出版、2015年刊行予定）である。その上で、「中国南朝劉宋貨幣経済の構造と特質」と題する論文を現在執筆中である。

第三に、蛮漢の対立と融合がすすんだ南北朝期において、じつは貨幣経済の進展こそが東アジアの人々を結び付ける一因となったのではないかとの仮説を検証した。日本で入手困難な『雲南文物』等の内部資料を北京出張を通じて蒐輯し、雲南省付近の三国時代から南北朝にかけての基礎的な分析を「三国時代西南夷の社会と恩信」（『帝京史学』第30号、2015年）と「三国時代西南夷の社会と生活」（2015年刊行予定）で積み重ねた。それをふまえ、現在上記課題に関する考察をふかめている。